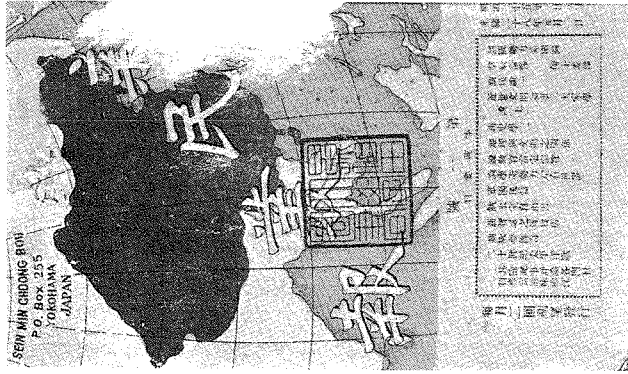
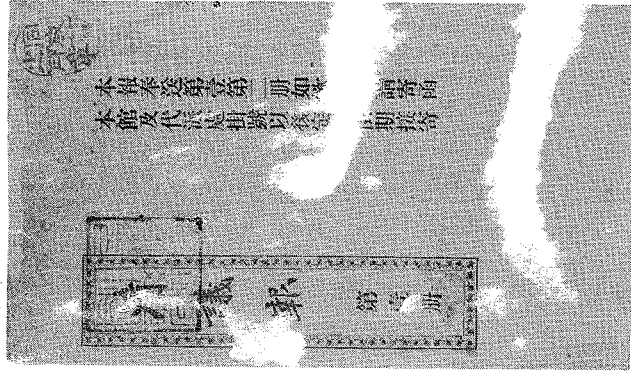


響影の誌雜本日



(國中)



(本日)



序

四年に亘る皇軍の奮戦幾多の尊き犠牲をして眞に有意義ならしむるためには、今後久しきに及ぶ經濟建設と共に、文化工作の必要なるは言を俟たない。文化工作なるものは高度の文化國から低度の文化國に施すものである。

元朝や清朝の漢人に對する文化工作といふことがいはれてゐるが元や清には漢人より高い文化はなかつた由來元や清の文化工作といはれてゐるものは實は文化工作ではなく、「文化人懐柔策」に過ぎない。だから年を経れば、反抗され驅逐されてしまつたのである。元や清の退却は漢人の同化力に由ると見る向が多いがその同化されるのがそもそも文化の低かつたが爲めである。

幸にも現在わが日本の總文化は中國より上位に在る。さればこそ明治二十九年以來絶えず多數の留學生を送つて來たのだ。彼等留學生は、絶えず各種のわが國の文化を輸入して行つたのだ。近代日本は既に中國の師となつてゐたのである。

中國は今こそ日本に従つてゐるが、いづれは元や清の如く日本を同化するだらう——こんなに考へてゐる中國人があるらしいが、それは近代日支文化關係を識らないものである。蒙古や

滿洲に中原から留學生を送つたことがあるだらうか？

近代日本は既に中國の師となつてゐたのである。これが文化工作可能の基礎である。われわれは日本が總文化力に於て中國に勝つてゐることを自覺しなければならぬ。しかしそれはわが日本國民は中國人を輕蔑し彼等に傲慢であれといふこととは違ふ。眞に實力あり自信あり自覺ある者は他に向つて假にも威張つてみる必要はない筈である。

過去四十五年間の滔々たる日本文化の大陸への浸潤こそは、光輝ある歴史の一章である。本書はその様相を諸断面から指摘するに努めた。

事變前の日本文化の大陸への輸入は、中國人が自動的に爲してゐたものであつて、日本人は寧ろ無關心であつた。今後の中國文化工作はそれとは逆に日本が自動的に働きかけるのである。

文化工作上如何なることをなすべきか？ 中國人の頭が心の底から下ることをしなければならぬ。彼等は現在までに如何なる程度に於て、如何なる方面に於て日本文化を攝取したか。先づこのことを再検討した上生かせるものはこれを生かして働きかける必要がある。

皇紀二千六百年のはじめに當り、貧しき研究の成果を捧げることが、この意味に外ならぬのである。

昭和十五年二月

著

者

目次

寫眞

日本雜誌の影響

字體の日本化

中國人教育の全盛時代

序

第一篇 日本から中國へ……………一

現代中國文化の日本化……………三

外交關係と文化關係——日本からの翻譯——日本からの重譯——言語文

學の日本化——字體の日本化——繪畫の日本化——日本文化の禮讚

日本文學の中國への影響……………四〇

中國情死考 五〇

第二篇 日本留國 七

中國留學生小史 五

『留學生取締規則』を續りて 六

留學史上の一大事件——「留學生取締規則」——留學生とストライキ——
 齊歸國——「三十年日記」——陳天華の自殺——中國公學——歐米勢力の進出
 ——わたくしの感想

留東外史と其の日本觀 二二

留東外史——不肖生——日本男性觀——日本女性觀——日本雜觀

事變と留學生 三六

第三篇 日本文化と中國文化 五五

日支近代化競走 五〇

中國雜誌の概觀 五九

新聞雜誌——中國に於ける初期の定期刊行物——中國雜誌の發生——中國
 雜誌の始祖梁啓超——文學雜誌の創始——革命前の雜誌界——「新青年時代」
 ——創造社時代——雜誌年——中國雜誌の諸斷面

新聞雜誌に於ける日支關係 一〇〇

新聞の發生——雜誌の發生——「新聞」と「新報」——雜誌の意味の三變——兩
 國同名——結論

近代中國の孔子觀 一三〇

明治時代の儒學批判と清末の孔子觀 一三〇

清末の孔子觀——明治時代の儒學批判——日支兩國に於ける差異

初期の商務印書館 一四二

中國書籍中の日本假名に就いて 一四九

排日以前物語 一五〇

支那は抗日を忘れるか——排日運動の概觀——排日のない時代——支那
 から呼びかけた日支親善——日本軍人に感謝す——日本人の獻身的教育

事業 — 下田歌子女史への讃辭 — 日本への求婚狀 — 雨過天晴

第四篇 文化工作.....三六

新支那の誕生と日支文化關係.....三七

中國知識階級に寄す.....三八

 運命悲劇 — 支那と中國 — 日本男子と日本女子 — 錦繡山河 — 東亞
 の將來

出版文化工作.....三〇一

今後の支那研究と文化工作.....三〇四

あとがき.....

目次 完

第二篇

日本から中國へ

現代中國文化の日本化

日本文學の中國への影響

中國情死考

日本文學の中國への影響

一

過去千年にわたる支那文學の日本文學への影響は今更私から説くを要しない。この逆現象——日本文學の支那文學への影響——は今からわづか四十年前に始まつたことではあるがその加速度的の輸出現象は蓋し驚くべきものがある。

過去數千年の燦爛たる文化を有つ「大中華民族」は鴉片戰爭に打負けてもその自尊心は毫も傷けられなかつた。たとひその刺戟から「洋務運動」(外國を學ぶ)を興したものがあつたといへ、それはまだ「整甲利兵」或は「聲光化電」等の技術方面にのみ限られてゐたので思想文學等精神文化は洋夷には無くして、中國にのみあり、としてゐた。

だが日清戰爭に於て渺たる三島日本に打ち挫がれたのには、「大中華」の夢も醒め始めざるを得なかつた。日本——それは嘗て吾が文化を受用したものであつたが明治維新以來急速に西歐文化を輸入消化した。今度の戰勝もその賜である。想ふに西洋文明の裏には、その精神文化もあるのだ、これをも學び取らねば今後の中國は世界の舞臺に立つことは出来ないのだ——これ

が、日清戰爭の結果覺り得たところであつた。

西歐文明——その消化者たる日本——日本に學べ——これが當時の先覺者の叫びであつた。張之洞は「勸學篇」に於て極力日本遊學を勧め、梁啟超は日書(譯)に努力した。これがため明治二十九年を嚆矢として、日本留學が行はれた。最初は僅か十三人であつたが數年にして數千人に達し、日華學堂、成城學校、清華學校、亦樂學院、同文書院、宏文學院等々の支那學生教育の學校が相踵いで興り、明治三十四年から明治三十九年頃までには常に留學生一萬人を迎へてゐた。その後、政治上の變動の餘波を受けて時に急激な増減はあるけれども、引續き數千の留學生が日本に學んでゐる。最近奉天、上海事變のため留學生の歸國する者が多かつた頃でも、尙ほ千名を下らず、事變前にはまた六千人を突破するの盛況であつた。

日本留學の最初には、軍事法律を學ぶのが主で、後には教育、最近では自然科學に傾いて來た。文學、哲學等を研究の目的で來朝した者は極めて稀であつた。だが元來文學的素質に富む支那留學生の中には當時日本文學の隆盛さに刺戟せられ、已の求めて來た研究科目をさし置き、文學の研究創作に轉向する者が意外に多かつた。

この外支那の政變毎に夥しい亡命客が日本に來た。彼等の中で日本滯在中、知らず識らず日本文學の影響を受けた者があつた。

日清戦後「維新運動」のために康有爲の參謀として、自覺しき活動をした梁啓超は、戊戌政變の結果日本に亡命した。そしてその政治運動の機關誌として横濱から発行したのが「清議報」である。彼は政治的啓蒙運動のために文學を利用することを忘れなかつた。「清議報」には「佳人の奇遇」や「經國美談」を翻譯して連載してゐる。更に明治三十五年には「新小説」といふ文學雜誌を同じく横濱から發刊した。(日本春陽堂の「新小説」はこれより七年前に發刊されてその頃盛大になつてゐたそれは彼の多年の腹案たる彼の政治理想を小説化したる「新中國未來記」を掲載することが主目的であつた。この「新小説」は十冊ばかりで停刊になつたがこれこそ彼がその廣告に「中國唯一之文學雜誌」と銘打つたとほり支那文學雜誌の嚆矢であつた。

彼は論文の隨處に文學の感化力の偉大性を説き、また言文一致が理想的文學たることを主張した。また大膽に日本的辭句を採用して支那の文體に一大變化を與へたのも、實に彼が最初の人であつた。

民國初年の文學者として、歿後の今もなほ多くの讀者を有つてゐる蘇玄瑛、曼殊、上人は日本河

合氏の子であり、作家時代に日本にゐた年月も永く、その著「文學因緣」「拜倫詩選」「潮言」「漢英三昧集」等は皆最初東京で出版されてゐることを想へば、日支文學を結ぶ人として忘れられぬ人である。(先年日本で物故文學者の展覽會を催した時、この人も加へられたことは記憶に新しいところである)

現在支那文壇の大御所として、日本にも有名な魯迅は、もとく醫學の研究に渡來した者であつたが、仙臺醫專に在學中、日露戦争に支那のスパイが虐殺される場面を見て、「吾が國の人々の無智な病を救ふことは、身體の病を救ふことよりもはるかに急務である」と感じ、直に醫學を捨て、文學に趨つたのは、有名な話である。

魯迅に劣らぬ「創造社」派の主將郭沫若も九州帝大醫科の卒業生であるが、これは一高在學中、文學熱に「苦しめられた」といつてゐる。その同志たる成仿吾は東大の造兵科卒業、郁達夫は東大に法制經濟を學び、そして彼の三角戀愛、四角戀愛……十二角戀愛の小説等を身以上に書きなぐり、最近まで摩登青年男女を魅了し、「張資平變じて張資本となる」と擲擻されるほどの印税を集め、「中國の菊池寛」と呼ばれてゐる張資平は實に意外にも理學士、礦物學專攻で、礦物に關する譯著も戀愛小説に劣らぬ程の量を示してゐる。ただ同志の申戯曲家田漢だけは東京高師の英文科に學んだのだから、最初から文學に縁のある方である。

これら「創造社」の連中は日本に在つて「創造季刊」の計畫をする前、この中の或る人々は日本文で「GREEN」といふ同人雑誌をやつてゐたといふ創造社小説集「木犀」を見よから日本文學との深き關係は想像せられる。

三

日本留學の支那學者學生の正確な統計は不明であるが數年前の話でも十萬以上といはれてゐる。

だから日本文學の刺戟から文學に志した人も相當の數に上ることが想像せられる。ともかく現在の文學者の大部分は日本留學生或は日本文學の多少とも影響を受けてゐる者であるといふことは否定出来ない事實である。

『中國文壇の大半は日本留學生が建築したのである。「創造社」の主要作家はすべて日本留學生であり、「語絲派」も同様だ。

『この外に些の歐米歸りや、彗星のやうに國內で奮起した新人があるが彼等の努力と彼等の建設とは何といつても前の兩派（創造社と語絲派——實業社）の勢力の浩大さには及ばないし、その上前の兩派の影響を多分に受けてゐる。

『このやうなわけで、中國の新文藝は深く日本の洗禮を受けてゐる。そして日本文壇の毒蟲も、すっかり中國に流れ込んでゐる』（孫洪若——卓子的跳舞）

では、彼等是如何なるものを日本から攝取したか？私はあらゆるものをと云ひたい。日本の文學論の紹介、日本の創作の翻譯、劇案。

日本に起る文學上の問題は過早く支那に移入された。自然主義の時代には自然主義をプロレタリア文學が起ればプロレタリア文學を。

『中國近年の洶湧澎湃たる革命文學の潮流は、その源流が北方のロシアから來たのではなくて、「同文」の日本からだ。……中國に突然勃興した革命文藝は、その模倣兒は完全に日本である。だから實際からいへば日本無産文學運動の一支流と見ることが出来る。それは、中國の革命文學の大將がすべて日本留學生（それは丁度日本の士官學校が中國「革命」の軍事領袖を創造したのと同様だであるからでもあるがまた「普羅列特利亞特」——意德沃羅基——の口號や理論及び創作の形式と内容の上からも見出し得る事である』（前欲原——日本無産文學之過去與現在）

厨川白村のものは殆んど譯了せられ彼の言葉は文學上の聖書の如く隨所に引用されてゐる。

日本文壇のエピソードの如きも、一ヶ月の後には彼等の常識化してゐる。例へば芥川龍之介が自殺すれば「私には芥川龍之介の死を爲ることも出来ない」とこぼす關秀作家があり谷崎

佐藤をめぐる妻君問題があれば、あらゆる文藝雑誌が問題にする等々。

創作の翻譯に至つては——日本ではあまり知られてない人のものでもどし／＼譯す。これは最近少し下火のやうだが、文藝雑誌は日本の翻譯の一つや二つを載せるのは常識のやうになつてゐた。新聞にも日本文學の翻譯を連載されることが珍しくない。單行本になつてゐるものだけでも、それも私の知る限り二百八十八種に及んでゐる。

更にその扱ひ方が鄭重である。歐米の大作と並べて「世界名著」とされてゐる。平林タイ子の「拋棄」といふ作品は「新流月刊」創刊號のしかも巻頭におかれてゐる。武者小路實篤のものは「ある青年の夢」(譯名「一個青年的夢」)が翻譯の勃興時代一九二二年魯迅によつて譯されて以來既に十三種も譯されて、氏は支那でポピュラーになつてゐるためか、廣告にも「武者小路最近の巨著」とあつて、「日本」もなければ「實篤」も要らない。

翻譯に至つては日本でもさうかも知れないが、支那でも日本小説の焼き直しは相當にあるらしい。張資平は正直なやうである。彼の初期の長篇小説「飛架」の序にいふ。「夏休中、日本朝日新聞所載の「歸る日」を読んでその描寫のうまいのに感心した……この飛架は純粹の創作といふことは出来ない。「歸る日」を模倣した作品といつてもよし、「歸る日」から暗示を得て書いたものといつてもよい」

吾々支那現代文學の讀者にとつて、一番不滿なことはその地名人名は支那のものであつても、その心理言語動作はあまりに西洋的若くは日本的なのが多すぎることである。

嘗て「中國新書月報」に若虛といふ人が「評中國著譯界」といふ題で「新刊書を開いてみると十の八九は日本から來た品だ」といつてゐる。これは文學物だけを指して言つてゐるのではないが、翻譯翻譯の全體を通じて——日本文學の支那文學への影響に準用することが出来ると思ふ。

四

では西洋文學の影響は、支那にないのか？あるある影からず。かの林琴南が自國以外の國語は悉皆わからないのに留學生の翻譯を通じて劇を小説にした滑稽さもあつたが、世界各國の文學を翻譯したその時日本の「不如歸」が譯された、最近また林雪清によつて改譯さるゝのは「文學革命」以前のことである。周作人の「域外小説集」でも多くの國々の作品が並べられてゐる。だがそれは日本留學中の工作であつた。その後多くの手により各國のものが多量に譯されてはゐる中で影響の強いのはタゴール等、だが日本と他の一國とを比較する時は日本文學の方が遙に強く影響してゐる。ましてや西洋文學の翻譯に際しても日本譯から或は日本譯

を参考として譯される場合が多いことは注意を要する。

日本物を譯す文學者は文壇の大部分であるが歐米物を譯す人は少い。

新劇の創作・演出に努力しつづけてゐる田漢が私淑する人は故小山内薫であり模範とする所は樂地小劇場である。

現在支那文壇では日本文學を識らざる者は文壇人にあらずといふ風に見える。

さればこそ日本留學生でない作家も名を成した後には多くは「遊日一遭」する。

『中國の軍閥の四分の三は日本出身であり中國の文學者の大部分も日本歸りである。……日本の學校の出身でない者も名を成した後には是非「遊日一遭」せねばならぬ。中國革命文學を代表する蔣光赤氏は去年日本に来て「衝出雲園的月亮」を書き年來洋行を叫んで遂げなかつた「狂騒運動」の長虹氏も最近東京に来た』(左手——由島上寄回大陸)

昭和九年から十年にかけては周作人隨筆家謝冰瑩女作家巴金小説家沈櫻女作家葉宗岱詩人鍾敬文散文家錢稻孫日本文學研究家等相踵いで來朝してゐる。

五

日本留學生上りが日貨排斥の急先鋒であり、「打倒日本」の指導者であつたことも大略事實

ではある。だが言ふこと勿れ、日本教育の効果はマイナスだと。奉天上海事變中でもなほ且つ日本文學の翻譯はなされてゐたのだ。

この數十年日支兩國は政治的には殆んど常に不和のやうであつた。しかし文化的には常に固き握手を保つてゐる。想ふに政治經濟は有形物の上に立つが故に自然争なき能はず文學學術は無形的であり分つも減ぜず學ぶも恥とするに足らざる人類の共有財なるが故に常に交離が絶えないのである。(この點支那の「文化侵略」なる語は成立しないこの文化上の握手の最大原因は前述の留學生の力であるが、「同文」といふこともこれに拍車をかけてゐる。

この文學的影響は支那の感情生活を自然と日本に接近させずにはおかない。否感情生活のみかある點行動にまで劇變を示してゐる。嘗て民國三年大正三年頃にはその理由が解せられないと晒つてゐる日本人の情死がその後紹介され理解され今や日本的に實行に移されてゐる。

日本文學の支那文學への影響の一面として見通すべからざることは支那用語の驚くべき日本化である。試みに最近幾種類か出た「現代語辭典」の類を繰くならばその悉くが日本語若くは日本の譯語であることを發見するだらう。

この兩國言語の接近現象は兩國文化の上にも國交の上にも雙方から觀て眞に慶賀すべきことである。

相當學が折れるのではないか？ それはしかし大きな問題ではないかもしれない支那人がほんとうに読みたいもの、日本文化の優秀性を示すものが多いことが第一條件である。過去四十年日本の本の翻譯に浮身をやつした支那である日本の最高文化をもつてさへゆけば飛びついて來ない筈がない。ことによると重慶の彼方で今でも日本書の翻譯をやつてゐるかも知れないのだ。

新民印書館の責任は大である創立以來日な既淺いことだから事業成績の批評は差控へるが折角資本や人材をもつてゆきながら再び商務印書館のやうに日本人が驅逐され抗日の有力機關となることなからんことを希望して止まない。

出版工作もその他の文化工作も要は支那人が心の底から尊敬することをやらねば無駄である。文化工作は高きより低きに及ぼすものである清朝の「文化工作」といはれてゐるものは實は「漢人知識階級懷柔策」でしかなかつたことを識らなければならぬ。

今後の支那研究と文化工作

一

滯支一ケ年間支那のことに就いてはさほど意外に感ずる事もなかつた。といふのは文獻の上で大體は知つてゐたからであらう。それにひきかへ、日本居留民については痛く驚かされた。その第一は在留民の數の多いことである。北京は三四萬と稱せられ占領後一年にもならぬ廣東でも八千に及んでゐるといふことであつた。優秀なる日本人の大陸に行くことの必要を滿洲事變以前から説いてゐた私としてはまことに喜ばしい極みであつた。多くの在留民の中には眉を擧めさせる者もないではないが私の接した日本人若き知識人の中には立派な人が多くあつて頼もしく感じられた。

在留民に就いて第二に驚いたことは、永く支那に住んでゐる日本人間に相反せる支那親従つて相反せる對支政策が在るといふ悲しむべき事實である。且に三十年支那にゐるA氏を訪へば曰く、「支那人にはなかなか好い處がある、到底日本人の及ばぬ處がある。」次に三十年支那にゐるB氏を訪へば曰く、「支那人といふものは實に仕様のないものである、救ひやうのない民族

である。かくてA氏は握手主義となりB氏は拳骨主義となるのは、自然の道理である。

これは何たる悲しむべきことであらう！支那讀本第一課がこの通り相違してゐては做ること爲すことに矛盾があり衝突があり、國家的に觀て無駄がある。

何故にかくまで正反對の意見が對立してゐるのであらうか？ それは多くが主觀的感情的、獨斷的の支那觀でしかなく、客觀的、理性的、科學的の支那觀でないからである。

二

支那の日本認識に較べれば、日本の支那認識は勝れてゐると思ふ。けれども隣國でありながら、「謎の國支那」といふやうなことを言つてゐるのは、あまり名譽なことではない。現在の日本に於ては、支那は事實「謎の國」なのである。支那をすっかり知つてゐるかの如き願をする「支那通」は、「支那はなかなか解らぬ」といふ支那研究者よりも本當のことを知つてゐないかも知れない。一人で支那の各方面の事に通じようとした従來のやり方は修正せられねばならぬと思ふ。そんなやり方では、ただ支那の一面を觀て全面としたり、病態のみを觀て常態を見失つたりする。かくて「謎の國」はますます謎でしかなくなるのである。

支那の正體を知るといふことは、従來でも必要であつたが、現在ほどその必要に迫られてゐる

時はない。今までは「謎の國」として愛玩してゐてもよかつたかも知れぬが、今はそんな時ではない。「謎」は解かなければならぬ。われわれ日本人の手で、一日も早く解かなければならぬ。またそれは必らず解き得るものであると思ふ。その鍵は個人の經驗を基とした感情論ではなく、精密な客觀的な科學的研究である。先づ細かなる部門に分けて正確なる研究をし、更に聰明なる頭腦によつてこれを綜合する必要があると思ふ。

研究の範圍は廣いほどよく、部門は細いほどよい。支那を知るためには、現代支那の研究だけで足らないと同様に、古代だけの研究でも足らない。また所謂直接支那の研究だけでも足らない。支那との比較對照の意味に於ても、歐米の研究が必要だし、それ以外の意味からいつても、あらゆる學者の協力が必要である。

日本には、支那を綜合研究すべき資料さへもない。古代の部は大體あるやうであるが、それと同様に必要であるべき近代のものになると案外にない。一ヶ所でよいから、近代支那のあらゆる文獻——單行本、雜誌、新聞等——の取り揃へてある所があつたならば、各部門の研究者が、それぞれの角度から研究することが出來て便利である。

これ等、各部門の正確なる支那知識を綜合して、縱横いづれから見ても動かず、甲乙誰から見ても異議の唱へやうなき科學的支那觀が発見されねばならない。

三

たとへば、日本に於ける古代支那の研究の方面は立派な業績があがつてゐる。しかし、多くは興隆の線に沿ふ研究で、それと現代支那との關係、すなはち衰退支那の研究が足りないのではないかと思ふ。従來は興隆支那の研究だけで足りたかも知れぬが、現在は、その支那が何故に衰退したかを究める必要があると思ふ。

支那民族性の研究といふことも、日本に限らず歐米人の間にも盛なやうであるが、未だ歸一するところを知らない。いづれも個人經驗的獨斷に終つてゐ、従つて正に相反するやうな議論すらも出勝ちである。これといふのも、民族性研究の基準民族性學の方法が成立してゐないが爲めである。支那民族性に限らず、わが日本の民族性に関して書かれたものを觀ても、必ずしも説が一致してゐない所を觀ると、民族性研究の方法が不完全不充分であると思ふ。一つの民族性を究明するのに、たとへば風俗習慣、言語文學、思想建築音樂その他いろいろの面から觀察せねばならぬと思ふが、今までの多くの民族性論は、單に風俗習慣の一二の現象を觀ることによりて、その民族性を決定してゐるのが多い。民族性の決定には、少くとも何れだけの面を見ねばならぬかといふことを先づ決定する必要がある。

民族性研究に必要な面が定つたならば、次には、その各方面の横への連絡や比重を如何にするべきかの方法論が必要であらう。その次には、現在と古代との矛盾に對する方法民族内の地方的差異の扱ひ方、更に進んでは、その民族と他の民族との比較方法等が確立せられねばならぬ。

かくいへば、この緊急時に、甚だ副はないかの如くであるが、これ以外に良策なく、取急いだ基礎のない支那觀は、害あつて益なしと思はれる。

一定正確の方法により、各部門より研究したものを綜合してはじめて、科學的支那觀が成立する。それは地動説が一般化したやうに異議を唱へることが出來ない。對支文化工作は正にこの基礎の上に立つべきである。最近二十年、理性的になつてゐる支那青年層も科學的支那觀の前には頭を下げるのみか、そして、それが何よりの宣撫工作になる筈である。

四

現地に於て宣撫工作その他支那人を直接指導したりする地位に在る人の中には、われわれは理論は要らない、實行あるのみだ、といふ人がある。事實その人は、身を以て範を示し、多くの支那人から尊敬せられてゐられるやうであるが、そんな人は、かりならよとして、立派ならざる日本人も大陸にゐるとしたらどうであらう。よき人の周圍だけは「善く」感化せられる代り、然ら

ざる人の周囲は日本を輕蔑することになる心配がある。差し引きどうなるかが問題となる、私は一騎討ち式の感化決してなしとしないし、その必要も深く感ずるが、その上に、更に全日本の文化的壓力がなければならぬと思ふ。「理論は要らない」といふ人が、本當に理論が要らなかつたら、「要らない」といふ必要もなからう。さういはれる言葉の中に、わたくしは空虚な響きを感じたのであつた。

知識階級は理屈をいふから放つておく、支那大部分の農民を相手に呼びかくべきだ、といふ議論もきいた。それは近々二十年の支那の歴史をも無視した近視眼的な考だと思ふ。

なるほど、その數に於て、農民は多いであらう、文盲八〇パーセントと呼ばれてゐる。そして彼等は従順であらう。だが彼等は誰にでも従順なのだ。清朝にも従順なれば、民國にも従順なのだ。嘗て西洋人に「あなた方は何故支那の王にならぬのか」といつて孫中山をして眉を擡めしめたのが彼等だ。彼等は昨日までの指導者に従順であつたやうに、今日の指導者にも従順なのだ。その代り明日、他の人が指導者となればまた今日の指導者に従順であつたやうに、新しい指導者にも従順なのである。これこそ「法法子」の従順なので、本當に理解ある力になる服従ではないのである。

大正十年、北一輝は「支那革命外史」の中に、「支那を〇はんと欲せば須らく一個師團の陸兵

と三隻の巡洋艦を以てすべし」と言つてゐる。しかるに、二十年後の支那は數多貴き皇軍の犠牲者を出させてゐる。さればとてわたくしは、當時の北氏の觀察必ずしも誤つてゐると思はない。この二十年間に支那はかくまで突變したことを指摘したいのである。その變化は、とりもなほさず知識階級の民族意識、愛國意識の變化若くは發生に起因するものである。今次の大變を惹起しかゝる長期の抵抗をするのも、結局は「五四」運動以來知識階級の間に生れた誤れる抗日意識に因るのであつて、大部分の農民は、昔日と大差ないのである。恐らく四川や雲南あたりですらも、農民はどちらにでもなるのではあるまいか。人數に於ては少いけれども、知識階級は、大衆に比し、支那に於てはかくの如く強い。これを放つておくといふ工作が果して健全であらうか。動かぬ支那のみを觀て變つた支那を觀ぬならば、北一輝の言を今の支那にでも實行出来ると思ふと同様の誤である。

五

最近は清朝初期の漢人に對する文化工作、宣撫工作が、いろいろ研究せられてゐるやうであり、またそれに関する著書も出てゐる。まことに結構な事である。しかしその中には、清朝初期の文化工作を直ちに採つて以て、我が文化工作に資せんとする向がある。これは根本的に誤つて